

# ハーン文学におけるルイス・キャロルの影響

那須野 絢 子

Ayako NASUNO. Lewis Carroll's Influence on Lafcadio Hearn's works. *Studies in International Relations* Vol.40, No.2. February 2020. pp.37-44.

Lafcadio Hearn (1850-1904) was a writer who is perceived as a great admirer of Japan and a critic of the Occident in comparison to the Orient, especially the Japanese. However, from a literary perspective, he never wrote about Japan without incorporating western thoughts and ideas. It can be said that this is the biggest attraction of Hearn's literature and the point that must be kept in mind to precisely understand his works.

In this essay, to show Hearn's literary perspective from his life in Japan, I will introduce two ghost stories by Hearn, "The Dream of Akinosuke" and "The story of Kōgi the Priest" as retold stories under the influence of the British writer, Lewis Carroll (1832-1898).

By comparing Hearn's stories to Carroll's *Alice's Adventures in Wonderland* and *Through the Looking-Glass*, I will show that it is possible that Hearn retold these two stories, which both use a dream as a literary motif, by modeled on Carroll's two stories that are also stories in the motif of a dream.

## 1. はじめに

明治時代に来日した作家ラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn 1850-1904) は、東京帝国大学、及び早稲田大学で教鞭をとった英文学者でもあった。その講義は国内外で高く評価され、教え子、上田敏、土井晩翠、小川未明らの文学活動に影響を与えた。

来日前のアメリカにおけるジャーナリストとしてのハーンの新聞記事を一読すると、事件や時事問題の他に、英米仏などの西洋文学に関する評論記事が多くみられる。また、彼の蔵書を収蔵している富山大学附属図書館ヘルン文庫の内訳をみると、最も蔵書数を占めている分野が英文学と仏文学であること、そして、英文学講師としての肩書を背負っていたこともあってか、総数 260 冊に及ぶ英文学作品の内の 235 冊を日本時代に買い求めていることがわかる<sup>1</sup>。

来日後は、ジャーナリスト及び作家として、日本取材に励み、日本人女性と結婚し帰化までしたハーンであるが、上に記した側面を考えると、自

身が生まれ育った西洋圏の文学を常に近い距離で感じていたことが明らかといえる。

しかしながら、日本におけるハーンについて言えば、西洋の文学や思想、はたまた、西洋人としての記憶やアイデンティティに背を向け、日本を愛し同国に帰化をした作家というイメージが、一般的にもたれていることは否めない。このことは、西洋人である彼が、時に西洋文明やキリスト教に対して辛辣な眼差しを向けながら、日本文化と日本人に並々ならぬ愛情と共感を寄せた著作を記した作家であったことに起因するといえる。平川祐弘は、論考「夢の日本か、現実の日本か」<sup>2</sup>において、過去一世紀の日本国外でのハーンの評価は、国際社会における日本の評価と連動すると述べ、国際社会で日本が優等生として振舞うと、それに伴ってハーンも評価され、日本が悪役を演ずるとハーンも非難の対象となることを指摘している<sup>3</sup>。つまり、先に述べたハーンを持つイメージゆえに、日本時代に手掛けられた彼の作品は、日本及び日本人と深く結び付いているのである。このことは同時に、ハーンという人物とハーン作品が、時に

日本人の民族意識に触れる存在にもなり得ることも示している。そして、このような一種独特な特質を持つ作品を残したハーンには、和訳全集の刊行、国語教科書への選定などで国内の読者層を増やすにつれて、徐々に「日本人以上に日本を理解し愛した西洋嫌いの外国人」というイメージを植え付けられていったのである。

冒頭でも記したとおり、ハーンは決して、西洋文化を完全に否定的に捉えていた人物ではなかった。宇野邦一は、著書『ハーンと八雲』の中で、ハーンをヴィクトリア朝の知識人として捉え、以下のように綴っている。

ハーンはただ日本を欧米に知らせることだけに終始して、同時代の欧米から孤立し、日本人になりきった文学者ではなかった。イギリスにおけるロマン主義やラファエル前派の美学や同時代の思想を深く理解し、遠くからそれらと対話し続けたハーンの足跡は、これらの講義録<sup>4</sup>に鮮明に刻まれている<sup>5</sup>。

そして、宇野が此处で示したハーンの帝大時代の講義録には、将来の日本文壇を担うであろう学生たちに彼が贈った以下のような言葉が残されている。

From western thought and imagination and feeling very much indeed can be obtained which will prove helpful in enriching and strengthening the Japanese literature of the future…

This is the period of assimilation; later on the fine result will show, when all this foreign material has been transmuted, within the crucible of literature, into purely Japanese materials<sup>6</sup>.

ここで述べられている、「異なるものが互いの良いところを吸収し合い、より良いものに変化していく」という考えは、ハーンが彼の異文化体験に根差し繰り広げた文筆活動を通して一貫して訴

え続け、自らの文学を以って体現した思想であり、また、ハーン文学の最大の魅力だと考えられるものである。平川祐弘は、論考「ハーンにおけるクレオールの意味」<sup>7</sup>において、このハーンの掲げた融合の理想を、「クレオール化」という言葉で言い表している。また、宇野邦一は、先にも言及した同著書において、ハーンを「東洋と西洋の区別、輪郭を透化させた作家」として捉え、日本人八雲と西洋人ハーンの二つの顔を以って行った彼の執筆活動を論じている。このようなハーンの高多様に焦点を当てた先行研究は、彼の作品を、日本を西洋へ紹介したガイドブック的な位置付けではなく、一つの文学作品として捉え、その本質に迫ることに寄与する。

本論考は、上記した先行研究において論じられている、異なる文化、思想の融合を理想として行われたハーンの文学活動の一端として、彼が同時代の英文学から受けた影響と、それを自身の作品に反映させた具体的事例を、イギリス人作家ルイス・キャロル (Lewis Carroll 1832-1898) の作品と比較しながら考察していく。

## 2. ハーンとキャロルの夢物語

まず始めに、本稿で取り上げるハーン作品“The Story of Akinosuke”（「安芸之介の夢」(Kwaidan 1904 収録)、以降「安芸之介」と記載）と“The Story of Kōgi the Priest”（「興義和尚のはなし」(A Japanese Miscellany 1901 収録)、以降「興義和尚」と記載）、及びこれらの比較対象として扱うキャロルの *Alice's Adventures in Wonderland*（『不思議の国のアリス』1865、以降『アリス』と記載）と *Through the Looking-Glass*（『鏡の国のアリス』1871、以降『鏡の国』と記載）に共通するモチーフである「夢」について触れる。

ルイス・キャロルは、ヴィクトリア朝を生きたハーンとはほぼ同時代の作家である。ヘルン文庫の蔵書目録には、*Alice's Adventures in Wonderland* (New York: Macmillan, 1894) と *Rhyme and Reason* (New York: Macmillan, 1895) の記載があり<sup>8</sup>、生前のハーンがキャロルの作品に親しんでいたことをまず記しておく。またハーンは、超自然的なも

の価値と文学の関係を論じた帝大での講義の中で、夢は文学的素材の宝庫であり、夢での体験を物語に取り入れている最も優れた作品として、キャロルの『アリス』『鏡の国』を挙げている<sup>9</sup>。

ハーンも着目しているとおり、これらキャロルの2作品、そして、「安芸之介」「興義和尚」では共に睡眠時の夢が物語のモチーフとして使われている。このような、文学の素材としての夢は、古く民衆の間で語られてきた民話に起源を持つ。ペトコヴァ・ゲルガナは論文「日本の昔話における夢」<sup>10</sup>において、国や地域問わず、古くから神仏の世界と強く結びつくものと考えられてきた夢の文学的モチーフとしての役割を、「人間の世界から異界につながる架け橋」<sup>11</sup>「現実という制約を超えた、ある民族のあるいは人類の過去・現在・未来を媒介するもの」<sup>12</sup>と位置づけている。さらに、ゲルガナによれば、睡眠中に見る夢と願望としての夢を区別することなく、同じ「夢」、「dream」の一語で表現する日本語圏と英語圏においては、睡眠中の夢を、見る者の未来のビジョンや願望と結びつける傾向があり、結果、近代以降、この二つの異なる概念が、同じ言葉で表現されるようになったと指摘する<sup>13</sup>。

本論で扱う4つの作品は、上で記したゲルガナの論にあるように、睡眠時の夢を媒体として主人公が異界へ行き、未来、現在、過去そして、主人公の願望と関わり合う体験をして現実に帰還するプロットを持つ。以下、各作品に描かれた夢を比較しながら、ハーン作品に見られるキャロル作品の影響を探っていく。

### 3. “The Dream of Akinosuke” と *Alice's Adventures in Wonderland*

本項では、ハーンの「安芸之介」とキャロルの『アリス』を考察する。両作品を比較するにあたり、主人公が夢の中で異界へ行き、そこで様々な体験をした後に眠りから覚め現実に戻るという共通するプロットを持ちながらも、対照的に描かれる各主人公の行動展開と、彼らが夢の中で足を踏み入れる異界の在り方に注目した。

まず初めに、安芸之介の行動に見られる受動性

と、アリスの能動性という両主人公の特性の対照性について述べる。安芸之介の能動性に関しては、すでにこれを指摘した先行研究、大澤隆幸の「常世の国はどこにあったか—「安芸之介の夢」について—」<sup>14</sup>がある。同論文の中で大澤は、「彼（安芸之介）はたいてい家来が言うがままで、積極的になにかをすることはしない。彼は目的語や受動態で言い現される。独立文の主語の時も、事態が彼の周りで自然に経過するようだ<sup>15</sup>」と指摘する。

これに相反し、『アリス』では、主人公の行動が常に能動的に展開される。例えば、二人の異界行きの場面は以下のように繰り広げられる。転寝を始めた安芸之介は、目の前に現れた大名行列の中の使者から異界行きを提案される。すると自分の意思が溶け去っていくと感じた彼は、言われるがままその行列について行き、常世の国へと向かう。一方のアリスは、転寝を始めた瞬間、奇妙な白ウサギを見つけ、好奇心からそれを追いかけて、自ら穴に飛び込み不思議の国での冒険が始まる。このように、これら二つの物語では、夢の中での異界行きという同じ出来事が起こるのにも関わらず、その行き方は、連れて行かれた安芸之介と、自ら飛び込んで行ったアリスといった具合に、対照的に描かれているのである。

ハーンは「安芸之介」の再話にあたり、中国唐末期編纂の陳翰による『異聞録』に納められた『槐宮記』を原典としている<sup>16</sup>。牧野陽子著『<時>をつなぐ言葉』によると、ハーンが原話に施した特筆すべき重要な改変は、原典に描かれていた人間界の縮図ともいえる地下の世界、つまり、官位や富の描写が著しく、立身出世が重視され、栄枯盛衰が存在する世界を根本的に変え、人々の善意と穏やかな平和が支配する理想郷「常世の国」に書き換えたことであるという<sup>17</sup>。そのため、「安芸之介」に描かれた主人公の受動的な性質は、すべてハーンの意図的な創作であるといえる。例えば、原典には記されていない、使者に付き従う安芸之介の心境を記した以下の描写、“in the same moment his will seemed to melt away from him, so that he could only do as the *Kerai* bade him<sup>18</sup>”からは、主人公から意図的に自我を消し去った筆者の思惑を感じずにはいられない。その後各主人

公たちは、異界において試練や転機を経験し、現実へと帰還するのであるが、その間、安芸之介が自らの意思で動くことは一度もなく、一方のアリスは常に自分の意思で行動し続け、物語は幕を閉じる。

続いて二つ目として、安芸之介の夢見た、秩序と規則に支配された常世の国と、アリスの夢見た無秩序な不思議の国の持つ特性に見られる対照性について記す。先に記したとおり、「安芸之介」の原典『槐宮記』の中の異世界は、栄枯盛衰が支配する現世同様の浮世であったため、常世の国で描かれた秩序と規則に関しても、ハーンの意味で付加された創作といえる。ハーンは、“according to the etiquette of courts”<sup>19</sup>, “a multitude of dignitaries sat in rank, motionless and splendid as images in a temple”<sup>20</sup>, “saluted the king with the triple prostration of usage”<sup>21</sup> などの表現を用い、宮中の整えられた秩序を度々強調している。

さらに、常世の国の王は、安芸之介に未開の地である菜州の秩序整備と習慣、法律の制定を命じ、これを遂行した彼に残された唯一の役目が、古来の習慣による儀礼につき従うことのみであったとハーンは再話する。

このような「安芸之介」に描き出された常識、道理、秩序が支配する世界と相反し、『アリス』に登場する不思議の国は、あべこべで無秩序なナンセンスな世界である。場面ごとにアリスの身体は伸縮し、めまぐるしく変化する。登場人物に関しても、狂った時計のせいで年中お茶の時間を過ごしている帽子屋と三日月ウサギ、身体が消えてもニヤニヤだけが残る奇妙な猫、事あるごとに「首をはねろ！」と命令する女王様など、常識では理解することのできないキャラクターたちが次々と登場する。そしてアリスは、目の前で繰り広げられる不条理に向かって、“Nonsense!”と悲鳴を上げるのである。

以上、「安芸之介」と『アリス』にみられる二つの対照的要素を指摘したが、このような顕著なコントラストが生まれた一因として、ハーンがキャロル作品から受けた影響の作用を考慮することができるのではないだろうか。つまり、彼は、『アリス』と同じプロットを持つ古典『槐宮記』を利

用して、そこにキャロル作品の主人公アリスと、彼女が夢見た不思議の国の持つ特性とは正反対の要素を敢えて強調しながら、「安芸之介」を完成させたということである。このことは、原話を大幅に改変して同作品の再話を試みたハーンの意図を探ることにより、信憑正を帯びてくる。結論からいってその意図とは、日本文化の深部にまで分け入り、共感の念を以って取材にあたったハーンが見出した日本の美徳が、急激な西洋化によって失われてしまうことへの嘆きと警告にあった。結果、ハーンは自身が理想郷として捉えた旧日本という過去の世界を作品の中で描こうとしたのである。では、なぜ『アリス』がハーンの「安芸之介」執筆にそのような動機を与えたのか。それは、『アリス』に投影された世相のためではないかと考えられる。

児童文学者のJ. ヴォルシュレガーは、著書『不思議の国をつくる』において、『アリス』の持つスピード性は、めまぐるしく変わりゆくヴィクトリア朝の様相を描き出し、物語の冒頭に登場する先史時代の動物たちは、進化論が引き起こした興奮と不安を暗示すると指摘する<sup>22</sup>。確かに、物珍しい生き物が散在し、次々にナンセンスな事態が主人公にふりかかる不思議の国は「動」の世界であり、産業革命で魔法のような利器が続々と生み出されていったヴィクトリア朝の世界と呼応する。日本に居ながらも、常に西洋世界と対話し続けた英文学者ハーンが、上記したような『アリス』に込められたキャロルの暗示を読み取ることは難しいことではなかったはずである。ハーンはこの暗示を上手く利用し、どんなに文明化が進もうとも、日本人が古くから持ち合わせた美徳を失うべきではないことを、自身の再話の中で示そうとしたのではないか。

エッセイ“About Faces in Japanese Art”(「日本美術における顔について」、*Atlantic Monthly* 1896.8 収録)の中でハーンは、作家が独自の想像力を駆使して微細な細部までも描こうとする西洋の絵画に対して、細部は描かず、対象の一般性や類型のみを表そうとする日本美術の没個性を分析し、その美点と優位性を解説している。彼はここで、日本の没個性を、秩序と自己抑制により社

会や民衆の利益を優先しようとする思想からくるものであると賞賛し、以下のように記している。

Japanese art reflects the simple joy of existence, the perception of natural row in form and color, the perception of natural low in change, and the sense of life made harmonious by social order and by self-suppression<sup>23</sup>.

このエッセイの中に見られる、ハーンが日本美術の中に見出した、「没個性」「自然の法則」「社会の秩序」「自己抑制」といった概念は、「安芸之介」で描かれた常世の国の様相と一致する。さらに、B.H チェンバレン（Basil Hall Chamberlain 1850-1935）に宛てた書簡の中には、西洋の特質である個人性が欠けているという日本人の欠点こそが、日本の社会生活の魅力の一つであると、ハーン自身の日本に対する思いを吐露しているくだりもみられる<sup>24</sup>。

このように、西洋の科学技術、文化芸術の急速な流入、更には、精神面における西洋化も避けては通れない潮流であった明治日本に身を置いたハーンは、『アリス』に描き出された西洋世界の文明化、個人主義を意識した上で、それと対照的に対峙する「常世の国」を描こうとしたのである。

#### 4. “The Story of Kōgi the Priest” と Through the Looking-Glass

次に、ハーンの「興義和尚」と、『アリス』に続いて発表されたキャロルのもう一つの代表作『鏡の国』を比較する。まず、以下に両作品の簡単なあらすじを記す。

「興義和尚」の主人公で、絵の名手である僧侶興義は、魚を描くことを特に好み、漁師に魚を獲らせては絵を描き、描き終えると餌を与え自由に放ってやるのが常であった。ある夏、病で亡くなったかと思われた興義であったが、葬式の後蘇生する。病で伏していた7日間、彼は魚になり湖で自由気ままに泳ぐ夢を見ていたのである。しかし、夢の中で課されたタブーを犯し、人間に釣り上げ

られてしまう。その後、まな板の上に置かれた興義の身体に包丁が突き刺さった瞬間、彼は夢から覚める。

もう一方の『鏡の国』は以下のとおりである。暖炉の上にある鏡を覗きながら子猫と戯れていたアリスは、夢の中で鏡を摺り抜けその向こうの世界へ行く。そこは、国全体がチェスのゲームに支配された世界であり、アリス自身もチェスの駒となって女王になることを目指す。鏡の国の不思議な住人たちに出会いながら、アリスはついに女王の座に就くが、赤の女王と白の女王と女王の資格を争う中で、痲癩を起し、赤の女王を揺すぶると、それがみるみるうちに子猫になり、アリスは夢から覚める。

これら二つの物語を比較すると、夢の世界で実現する主人公の願望成就の物語という共通点を見つけることができる。第2項でも参照したゲルガナの論考では、物語における夢のモチーフの役割の一つとして、主人公の望ましい現実の投影が指摘されており<sup>25</sup>、「興義和尚」『鏡の国』はこのタイプの作品に属するといえる。アリスは眠りに落ちることで、行きたいと強く願った鏡の向こう側の世界に足を踏み入れることを可能とし、チェスのルールに支配された鏡の国で、女王となることを成就させる。一方の興義は、病で朦朧とする意識の中で湧いた、湖に入って泳いでみたいという願いが夢の国へ行くことにより叶えられ、竜王から授かった黄金の鱗で水の中を自由に泳ぐことを可能とするのである。

このように、夢を利用した願望成就の物語という共通のプロットを持つこれらの作品であるが、「安芸之介」と『アリス』のケースとは異なり、ストーリーの細かな展開に関しても共通点がみられる。例えば、主人公たちの異界への行き方と現実への戻り方は以下の通りである。

##### ①「興義和尚」

I wandered on and on till I reached the lake; and the water looked so beautiful and blue that I felt a great desire to have a swim. I took off my clothes, and jumped in, and began to swim about; and I was astonished

to find that I could swim very fast and very skillfully...<sup>26</sup>

## ②『鏡の国』

…Oh, Kitty! how nice it would be if we could only get through into Looking-Glass House! …She was up on the chimney-piece while she said this, though she hardly knew how she had got there. And certainly the glass was beginning to melt away, just like a bright silvery mist.

In another moment Alice was through the glass, and had jumped lightly down into the Looking-Glass room<sup>27</sup>.

① ②を比較すると、湖に飛び込み自由に泳ぐことを切望した興義と、鏡をすり抜けたその先の世界に行くことを切望したアリスは共に、それらが不可能であることを理解しているのにも関わらず、自らがそこへ目がけて突き進んでゆくことにより、異界への道が開けるといふ共通する展開が見て取れる。両主人公は、現実から異界へ渡る瞬間に眠りに落ち、それによって行きたいと思った世界へ行くことが叶えられるのである。また、「興義和尚」と『鏡の国』には、前項で論じた「安芸之介」や『アリス』のように、主人公たちが転寝をして眠りの世界へ赴くというくだりは描かれていない。そのため、物語の最終場面に来るまで、読者は主人公が夢の中で異界へ足を踏み入れたことを悟ることはできない。あたかも彼らの強い念が異界への扉を開いたかのように描かれているのである。

では各主人公たちの異界から現実への帰還（夢からの覚醒）に関してはどうかであろうか。簡潔に各結末をまとめると次のとおりである。自らが魚となった興義は、竜王（Dragon King）の命で、魚で作った餌を口にしてはいけないというタブーを課される。それにも関わらず、空腹に耐えかね餌に食らいついてしまった興義は、旧友の竿で釣り上げられ、まな板の上で調理されかけた痛みで目を覚ます。一方のアリスは、頭に冠を添えられ、女王となったにも関わらず、白の女王と赤の女王

から女王の資格を問うための不条理な問題を次々に出される。そのうちに始まったパーティでは、料理が運ばれては来るものの、その紹介が終わると下げられてしまい、ご馳走にありつくことができない。アリスが痲癩を起こし、赤の女王をつかんで揺すぶると、いつの間にか女王は子猫に変わり、アリスは夢から目を覚ます。魚になった興義と女王になったアリスは共に、覚醒の時間が近づくにつれ、夢の国での願望成就の効力が徐々に弱まり、ついには現実の世界へと戻っていく。まるでシンデレラにかけられた魔法が、夜の12時を過ぎて解けていくような類似した雰囲気を持つ結末である。

ハーンは上田秋成（1734-1809）の『雨月物語』（1776）に収録されている「夢窓の鯉魚」（卷之三）を底本として「興義和尚」を再話している。原典と再話を比較すると、大きな変更や追加削除は加えられておらず、原話をほぼ活かす形で語り直されたことがわかる。このことから、原話に改変を加えることで、自身の思想や文学のオリジナリティを表現した「安芸之介」の場合とは違い、ハーンは原話そのものから何らかの靈感や感銘を受けて、英語で語り直しを行い、「興義和尚」を著作の中で紹介したと判断することができる。そして、この事実をこれまで見てきた「興義和尚」と『鏡の国』の類似性と併せて考えた時、ハーンが「夢窓の鯉魚」に感銘を受けた理由の一つとして、キャロルの影響を挙げることが可能ではなかろうか。ここで、「興義和尚」と『鏡の国』を結びつけるハーンの発言が、帝大時代の講義録“The value of The Supernatural in Fiction”の中にみられるので以下に抜粋する。

The other day, in a story which I read for the first time, I was very much interested to find an exact parallel between the treatment of a supernatural idea by the Japanese author, and by the best English author of dream studies. The story was about a picture, painted upon a screen, representing a river and a landscape. In the Japanese story (perhaps it has a Chinese origin) the

painter makes a sign to the screen; and a little boat begins to sail down the river, and sails out of the picture into a room, and the room becomes full of water, and the painter, or magician, or whoever he is, gets into the boat and sails away into the picture again, and disappears forever... The same phenomena you will find, under another form, in "Alice in Wonderland", and "Through the Looking Glass"<sup>28</sup>.

ハーンがここで指摘している日本の物語とは、「The Story of Kwashin Koji」（「果心居士のはなし」、*A Japanese Miscellany* 1901 収録）として再話された「果心居士 黄昏草」（『夜窓鬼談』下巻収録）であり、「興義和尚」の原典「夢応の鯉魚」に関しては触れられていない。しかし、同一節で説明されている、絵の中の世界が現実の世界と混ざり合うくだりと一致するエピソードが、「興義和尚」の最終場面にも描かれている（興義の手なる絵から魚が抜け出し、湖に泳いでいく）ことに注目すると、ハーンが「夢応の鯉魚」とキャロル作品との間にも、「果心居士 黄昏草」同様の類似性を感じ取った可能性が考えられはしないだろうか。更に、同講義においてハーンは、「果心居士 黄昏草」に描き出された、現実世界と絵の中の異界が溶け合うモチーフを、夢が橋渡しとなり、主人公が現実世界から地下の異界へ、そして鏡の中の異界へと足を踏み入れていった二つのアリスの物語にも共通するものとして捉えている。それならば同じく、主人公が夢によって現実世界から水の中の異界へと入っていく「興義和尚」においても、同様の一致を主張することができるはずである。「興義和尚」と「果心居士のはなし」はともにハーンと同著作（*A Japanese Miscellany*）に収録されているため、彼が同じ時期にこれらの古典に触れていたことは確かである。そのため、「果心居士のはなし」に続き、「夢応の鯉魚」に触れた際にも、上述した講義でハーンが唱えたアリス物語との共通点を考えたに違いない。このように考えると、ハーンが『鏡の国』に触発されて「興義和尚」の再話を試みた可能性を指摘することができる。

## 5. 結び

以上、ハーンの再話作品「安芸之介」と「興義和尚」を、キャロルの『アリス』と『鏡の国』に対比させながら比較検証を行った結果、「安芸之介」と『アリス』、そして、「興義和尚」と『鏡の国』との間に、ハーンがキャロルから受けた影響による関係性を見つけ出すことが出来た。これらの発見を、以下に述べるハーンの言葉及び作品に関する事柄と照らし合わせ、本稿の結びとしたい。

前項で参照した帝大での講義において、ハーンは、夢は文学の素材の宝庫であり、文学作品で超自然が巧みに扱われる時、その源となるものは夢の中で体験したことがらであると述べ、物語における夢の効果の重要性について説いている<sup>29</sup>。そんなハーン作品には、ここで扱った2つの作品以外にも、“Vespertina Cognitio”(1898), “Nightmare Touch”(1900), “Levitation”(1900), “Readings from a Dream Book”(1900), “The Eater of Dreams”(1902) など、睡眠時の夢を材料とした著作がアメリカ時代のものも含め、数多くみられる。そしてこのことについて特筆すべきは、これらの作品群のうち、日本古典を素材とし、エッセイではなく物語の中で夢が媒体となった異界がモチーフとして扱われているものは、「安芸之介」と「興義和尚」の二つのみであるということである。また、ハーンは上記の講義において、キャロルを“the best English author of dream studies”<sup>30</sup>と評価し、夢を文学の材料として扱ったイギリス人作家の中で最も優れた人物として位置づけており、キャロル作品を夢物語の模範として捉えていたことがわかる。

以上のことを踏まえると、本稿で考察した「安芸之介」と「興義和尚」は、『アリス』と『鏡の国』から靈感を得て再話された物語であると同時に、ハーンが夢物語の模範としたキャロルの2つの物語と対になるような形で意図的に執筆した作品であると考えることができる。

日本の古典を素材にして、そこに西洋文学の思想を交えながら作り上げられた「安芸之介」と「興義和尚」は、日本におけるハーンの西洋文学との対話が影響を与えた作品として位置付けることができるのである。

## 注

- 1 富山大学附属図書館『富山大学附属図書館所蔵 ヘルン文庫目録』富山大学附属図書館、1999
- 2 日本アイ・ビー・エム株式会社『無限大』、1991、pp.34-50
- 3 *Ibid.*p.35
- 4 コロンビア大学教授のジョン・アースキンが、ハーンの教え子たちの講義聴講ノートをもとに、1915年、44編の講義を収録し *Interpretations of Literature vol.1,2* を、ニューヨークのドッド・ミード社より出版。その後1916年から1922年まで、計7冊のアースキン編ハーノ講義録が、同出版社より出版された。
- 5 宇野邦一『ハーノと八雲』角川春樹事務所、2009、p.194
- 6 Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature volume2*, New York, Dodd, Mead & Co., 1922, pp.369-370
- 7 平川祐弘・牧野陽子『講座小泉八雲 I ハーノの人と周辺』新曜社、2009収録
- 8 富山大学附属図書館『富山大学附属図書館所蔵 ヘルン文庫目録』富山大学附属図書館、1999、A-16
- 9 Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature vol.2* , New York, Dodd, Mead & Co., 1922, pp.94-95
- 10 荒木浩『夢と表象 眠りところの比較文化史』、勉誠出版、2017収録
- 11 *Ibid.*p.116
- 12 *Ibid.*p.126
- 13 *Ibid.*pp.121-122
- 14 八雲会『へるん No.45』、2008、p.14
- 15 *Ibid.*p.14
- 16 牧野陽子『<時>をつなぐ言葉』新曜社、2011、p.312
- 17 *Ibid.*pp.314-315
- 18 Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn 11*, Rinsen Book Co., 1988, p.248
- 19 *Ibid.*p.249
- 20 *Ibid.*p.250
- 21 *Ibid.*
- 22 J. ヴォルシュレガー著・安達まみ訳『不思議の国をつくる』河出書房新書、1997、p.65
- 23 Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn 8*, Rinsen Book Co., 1988, P94
- 24 ラフカディオ・ハーノ『ラフカディオ・ハーノ著作集 14』恒文社、1983、p.408
- 25 荒木浩『夢と表象 眠りところの比較文化史』、勉誠出版、2017、p.125
- 26 Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn 10*, Rinsen Book Co., 1988, p.234
- 27 Lewis Carroll, *The Complete Illustrated Lewis Carroll* , Wordsworth Library Collection, 2008, p.132
- 28 Lafcadio Hearn, *Interpretations of Literature vol.2* , New York, Dodd, Mead & Co., 1922, p.95
- 29 *Ibid.*pp.93-94
- 30 *Ibid.*p.95